
少女と断ち切り屋と悪魔の針

Acoknight

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少女と断ち切り屋と悪魔の針

【Nコード】

N2646Y

【作者名】

Acoknight

【あらすじ】

自分の人生をケチのつけどころでいっばいと断じている孤独な少女アリーセ。ある冬の寒い日、アリーセが奇妙な男『断ち切り屋』と出会った瞬間から、彼女の辛く苦しくも平穏な日々は終りを告げる。そして、『悪魔の針』が彼女を導き、運命の『糸』に絡め捕られ、波乱に満ちた人生が幕を開ける。

終わりと始まり

「金貨五百枚」

そんな金額、聞いたことがない——少なくともぼくの短い人生の中では。

ぼくの人生、ケチのつけどころでいっぱいだ。

つけどころが多過ぎて、昔の幸せな思い出もかすむところかケチだらけの人生にしてくれた原因として恨んだ事さえあった。

「ご、ご、五百う……五百枚ですつてえ!？」

派手なドレスと宝石で中年女の体を飾っている守銭奴ぼくのかいぬしババアの厚化粧の顔も驚きで歪んでいる。普段ならざまあみると、心の中で思うだろうけど今夜は違う。

今夜の商談にはぼくもある意味で大いに関わっているため、ババアのレアで無様な表情さいこうを楽しむことが出来ない。

「何度も言わせんな、五百だ、五百。銅貨でも銀貨でもなく、金貨で、な」

大いに関わっていると言っても、銅貨四枚のクラム・チャウダをカップでひと月一杯しか食べられないぼくには商談に参加するなんてとても出来ない。

この商談での僕の役割は二つ……きつかけを作った事、そして、後一つは——

「そのメスガキ一人に五百なら儲けもんだろ」

ぼく自身が今目の前で行われている人身売買とりひきの商品であることだ。「今ならさらに出血大サービスであんたの困った縁を無料で一本断ち切ってやるよ」

買い手の男、『断ち切り屋』さんのエッジ・シュエレは片方の口角を上げてにやりと笑った。

ぼくの人生、ケチのつけどころでいっぱいだ。

でも、エッジとぼくの間に在る『糸』がぼくをケチばっかりの人生から引っ張り出してくれる、そんな予感がした。

冬の朝

朝。ちよつと硬めのベッドから起き上がり、カーテンとはとても呼べないボロボロの布をめくって窓をのぞいた。

窓から覗く外はまだ真つ暗で、日の出はまだ。でも、ぼくにとつてはもう朝だ。

「今日も相変わらず寒いなあ」

ベッドの上で「はあ」とため息をつき、もう少し毛布の中で暖つていたいという心の欲求を全力で無視して、床に並べてあるこげ茶色のスノウブーツを穿いて、立ち上った。

ベッドの脇にちよこんと置いてある足が一本足りなくてバランスの悪い椅子の背もたれにかけてあつた大き過ぎてぼくの体に全然合っていない上着を取る。

一步、二歩、三歩。

ベッドからドアまでたつた三歩。すごく、狭い。部屋のほとんどをベッドが占めていて、今置いてある物以外の家具を置くスペースがない。それどころか、ベッドがドアの半分近くまで場所をとってしまっている。幸運だったのはドアが内開きじゃないこと。

ドアノブに手をかけて……深呼吸を一回。

「今日は見えるといいな」

ドアを開けて廊下に出る。ちよつと暗いけど、怖くはない。慣れつつすごいもんだ。ここで飼われ始めた頃には、夜明け前の廊下は暗くて寒くて、本当に怖かった。

二年前、お母さんが死んでからすぐに、街を統治している貴族様の使いが故郷^{うち}にやって来て、ぼくを大きなお屋敷に連れてきた。そして、初めて会った貴族様はぼくの実の父親だと名乗った。

そこで知った事はぼくのお母さんは昔、このお屋敷でメイドとして働いていて、まあ大人の色々な事情があつて貴族であるご主人様との間にぼくが出来たらしい。ご主人様はお母さんとぼくを家族と

して迎え入れようと考えていたんだけど、告げる前にお母さんが去ってしまったんだって。

で、ぼく達の居所が分かった時にはお母さんが病気で死んじゃった後で、娘のぼくが孤児院に引き取られるのを止めて、実の子供として彼のお屋敷に迎え入れることとなったんだそうだ。

お母さんが死んですぐのぼくとしては知り合いが誰もいない孤児院よりも父親と名乗る人と家族として暮らせる方がいいな、と思っていたからだ。本音を言うときびしかったし。

ちよつと昔の事を思い返しながら、ぼくは暗い廊下を歩く。

お屋敷に來た当初はご主人様の娘として丁重にお世話してもらったなあ。

廊下の一番端にある物置部屋に到着、そのドアを開けて掃除道具を取る。

さあ、とつとと掃除を始めよう。それでとつとと終わらせよう。

今日は月に一回の楽しみが待っている。

メイドさん達や使用人さん達用のトイレ全部と浴室、そして、ぼくの部屋がある廊下の掃除を終わらせた。

うん、我ながら見事な仕事ぶりだ。しかも早い。使用人さん達が起きる前に。ぼくって掃除の天才かも！……そんな天才性いらないよ、バカだな、ぼく。

後は、使用人さん用の浴場に補充する石鹸を買いに街のお店に行くだけだ。そして、ぼくはこれ wait していた。

お屋敷のあちこちがにわかに動き出してきた。そろそろ出かける準備を始めようかなと思いつながら半地下にある自分の部屋へ戻った。部屋の前に着いたら、いつも通り朝ごはんがのせられた木製の古いお盆がドアの前に無造作に置かれていた。

食べ物を見たせいかおなかがククッと鳴った。

お盆を持って部屋に入る。ぼくの部屋にはテーブルなんて物はないのでベッドの上にお盆を置いて、自分も腰かける。

お盆の上にはちよつと硬くなったロールパンと（賄い用と思しき）冷めたスープがボウルに一杯。おお、今日のスープには鶏肉のかけらが入っているぞ、ラッキー！

……こんな事ぐらいで興奮できるばく自身にちよつと悲しくなった。

「いただきます」

お母さんが生きていた頃やこのお屋敷に来たばかりの時には食べる前には神様達にお祈りをしていたけど、もうしなくなった。

神様達っていうのは世界にある運命（だったかな、確か）をいじって人間を幸福へと導くんだって。

昔のぼくなら「そうなんだ」、神様達ってすごいな」と言つて無邪気に信じていたけれど、ぼくの人生は現在ケチのつけどころでいっぱいなので信じる気なんか全く毛ほどもない。

本当にいるかどうかわからない神様へのお祈りの事なんかどうでもいいし、ぼくはいま自分の空腹をどうにかしなきゃいけないので食べ始めた。

あまりおいしくなかった朝ごはん（パンがいつもより硬くて古かった）の後片付けも終わらせて、お出かけの準備も出来たので執事の所へ向かう。

執事であるステュワードのお部屋に到着、ドアを二回ノック。彼は神経質なのかそうしないと不機嫌になる。このお屋敷での経験で覚えた事だ。

「どうぞ、お入りください」

ドアを静かに開けて、朝の挨拶をしながら入室する。

「おや、アリーセお嬢様ではありませんか」

縁なしメガネをしてタキシードを着た男の人がいかにも高価そうな革張りの椅子に座りながら、豪勢な仕事机の上で書き物をしている手を止めずに、ぼくを見ないままに答えた。

「アリーセはぼくの名前だ。お母さんが付けてくれた名前なんだ。

「おはようございます、ミスター・ステュワード。……あ、あの、今日は使用人さん達用の石鹸を買いに行くので、お金をいただいてもいいですか？」

ぼくは頭を下げながら、できるだけへりくだってお願いする。

「そうでした。本日はアリーセお嬢様のお出掛けの日でしたね。少々お待ちください」

彼は手を止めて、冷たい感じのする眼でぼくを見た。やっぱり嫌だな、この人のぼくを見る目。

でも、今日は待ちに待った楽しみの日！　こんな冷血執事に気分を凹まされてどうするぼく！！

ステュワードがぼくに渡すお金の準備をしているのを待ちながら、ぼくが壁際で月一の楽しみに心を躍らせていると唐突に勢いよくドアが開いた。

「セドリックウ！　私のセドリックウ！」

毒々しい赤色の派手なドレスとたくさんの宝石で着飾った厚化粧の中年女が開いたドア以上の勢いでがなりながら入室してきた。ちなみにノックなんかはしていない。

「おはようございます、奥様。貴女のセドリックはここに居ります」名前を呼ばれたステュワードは驚きを通り越して呆れる程の素早さで立ち上がったと思った時には、彼の主人である中年女の前に立っていた。

「もおう、奥様だなんてえ、いつも言ってるでしょお、な・ま・え・で呼んでつてえ」

「申し訳ございません、エマ様。ですが、私には天上におわす美の女神の様な貴女様の御名前があまりに神々しく、私のような卑賤な者がみだりに口にしてはならないと自らを戒めておりました」

「ああん、もおう、いけずう。でもお、そんな謙虚な姿のあ・なた・を愛しているわあ」

「奥様、いえ！ エマ様を悲しませた浅慮な自分を改め、エマ様のお望み通り、今この時より御名前だけでお呼びする事を神々に誓います！」

「もおう、神なんかに誓うなんてえん。あなたもあなたの誓いもすべ・て、私のものお」

「はっ！」

絶句。

何だ、ぼくの数歩先で上演されているこの笑えない喜劇は。いや、気持ち悪いだけだから喜劇じゃないか。

……にしても相変わらざるの気持ち悪さだ、このババアは。何が「もおう」だ、お前は牛か。

今乱入してきたこの中年女はお屋敷の現主人でぼくの義理かいぬしの母であるエマ・アフアーレだ。

「あらあ、そこにいるのは薄汚い犬娘じゃない。どこの野良犬が屋敷の中に紛れ込んだかと思ったわあ」

ババアは今気付きましたわ、ヲホホって感じでぼくに声をかけてきた。

「おはようございます、ご主人様……」

ム力つくし気は進まないけど、ババアを怒らせても損なだけなので丁寧ていねいに朝のご挨拶をする。

「で、犬娘は私のセドリツクの部屋で何をしているのかしらあ？」

へマした。ババアはぼくボクの存在自体が端から気に入らないらしいので殊勝な態度も意味がなかった。

「エマ様、アリーセお嬢様は週に一度の街に出てのお使いなので、お金を受け取りにいらっしゃったところでございます」

「ああ、そういえばそんな使い走りをさせていたわねえ、確かあ。

まあ、犬娘にはそれぐらいしか使い道がないものねえ。まあまったく家柄が良かっただけの旦那は死んでもろくなモノを遺さないわあ」

「左様でございます、エマ様」

ぼくの父親だと名乗っていたお屋敷のご主人様は一年半前に突然死んだ。お医者様が言っていたのは病死だったそうだけど、ぼくはそう思っていない。とある理由でぼくはこのババアと冷血執事エマ ステュワードが彼を殺した事を確信している。

「その目は一体なあに？」

ババアは目敏いのか、ぼくが彼女にとって不穏な考えをした事を察したのか、ぼくに近付いてきた。ババアが目の前に来たと思った瞬間……

「いぎつー!!」

右側の頬に衝撃を受け、ぼくは倒れた。

いたい、ほっぺがいたい。

突き刺さるような痛みが襲ってきた。いつものことだけど、慣れることはないっていうか正直、無理。

ババアの手には親指以外の指全部に大きい宝石の指輪がはまっているので平手で殴られたとしても本当に痛い。

「エマ様、御怪我はございませんか？」

目がちかちかする。

「ええ、薄汚い犬娘に触れたせいでちょっと汚れたけどお、私の手は美しいままよお」

鉄の味がする。口の中が切れたみたい。

口の中を舌でもごもごさせる。よかった、歯は折れていないみたいだ。

倒れたまま右手でまだ痛む頬をさする。涙が出てきた。

本当にぼくの人生、ケチのつけどころでいっぱいだ。

泣いているのをババア達に見られるともっと不機嫌になるので、気付かれる前に上着の袖で拭って、まばたきを数回して目を数秒つぶって開けると――

見えた。

『糸』が見えた。

いくつかの色をした『糸』がぼくの体からのびているのが見える。やった。今日は見えた。

朝ごはんがいつもよりもまずかったり、嫌みを言われたり、ババアに殴られたりで気分がどん底にまで落ち込んだけど、『糸』が見られた喜びで頬の痛みすら一瞬で忘れた。

目で『糸』を追うと数本がババアとステュワードにつながっていて、十本以上は部屋の外へと伸びている。

気付かれないように細心の注意を払って、ババア達の方を見るとぼくよりも本数が多い色とりどりの『糸』が見えた。

ちなみに『糸』はぼくにしか見えないらしい。死んだお母さんに話したけど、お母さんには見えなかったみたいだ。他の人にも確認したいけど……まあ、ぼくと話をしてくれる人なんて、少なくともこのお屋敷にはいないから。

ぼくだけが見えるこの『糸』はどうも人と他人とのつながりを象っているらしい。

何故なのかは分からないけど、ぼくにはそれぞれの『糸』がどういった関係を表しているのかが見ているとわかる……というか感じ取れるみたいなんだ。

家族、友達、恋人に夫婦、主従もそうだし、さらには憎しみや嫌悪とかの人間特有のやな感情も『糸』として見えるんだ。

関係や感情だけではなく、人を殺した事がある人には特別毒々しい黒い『糸』が体からのびている。

ババア達がぼくの父だと名乗っていたご主人様を殺したのだという確信を持っていたのはぼくが黒い『糸』がババア達二人の体からエマとステュワードご主人様の体にのびていたのを見たからだ。

「アリーセお嬢様、本日のお使いに必要なお金が入っておりますので、お受け取りください」

ステュワードは倒れているぼくの目の前の床に銅貨が入った小さな麻袋を放り投げた。がちゃん、と見た目よりも重そうな音が部屋に響いた。

「銅貨程度でも金は金なんだからねえ、くすねるんじゃないわよお。ああ、心配だわあ、浅ましい犬娘に金を渡しておくのはあ」

ドキッ、とした。

「大丈夫ですよ、エマ様。この私が必要な額以上のお金をアリーセお嬢様にお渡しする筈が御座いません」

「そうねえ、私のセドリックがあ、その程度の間違いを犯す筈がないものねえ」

た、助かったあ……。気付かれていたら、ぼくの月一の楽しみを諦めなくちゃいけなくなっていた。

ぼくは四つん這いで顔を見られないように床に落ちている麻袋を拾った。

顔、というかぼくの眼の今の状態を他人に見られるとまずい。

ぼくが今みたいに人の間にある『糸』を見られるようになっていると、右眼の瞳の色がきれいな蒼色に変わっているんだ。普段はダークブラウンなんだけど。

他人から見たら突然オッド・アイに変わったたりして気味悪がられたり、魔女裁判にかけられたりするから外で見せちゃダメよ、とお母さんに初めて見せた時に言われた。お母さんはその後で「アリーセのその瞳は本当にきれいな、お母さんは大好きよ」とも言ってくれて、すごくうれしかったな。

ぼくは下を向きながらゆっくりと立ち上がって、ババア達に「ありがとうございました、では失礼します」と言って、ドアの方に歩き始めた。

ババア達はぼくに対してはもう興味がないのか、家の仕事だか外での商売だかの話を始めていた。

「……で、連中の仕事の進み具合はどうなのお？」

「はい、昨夜の時点で二件、既に終わらせております」

「さつさと残りも片付ける様に仕向けてねえ。ただでさえ、高い金払っているんだからあ」

やっぱりぼくにはわからない話だ。ステュワードの部屋のドアを

静かに閉めながら、もう一回ババア達の方を見た。

ん、あれ？

気のせいかな？ 黒い『糸』が三本に、増えてた？

道中

お使いの買い物も無事終わらせて、ウキウキワクワクしながら人通りの多い街の大通りを歩いていく。

キャフルという名前のこの街はカームレッドやグッドブリックタウンとも呼ばれるくらいきれいで有名な街だ。

ここは道路も建物も全部レンガで舗装されていて、色のおかげかすごく温かみを感じる可愛い街なんだ。

二年前まで住んでいた故郷むらでもこの素敵な街の事はよく聞いていて、お母さんと一緒に住んでみたいなと思っていたのも今ではいい思い出。

お母さんにも頻繁にキャフルにいつか住みたいね、と笑いながら夢を話していたけど、お母さんもそうなたらいいわねといったも笑顔だった。

これから向かう月に一回の楽しみもあるんだけど、週に一回のお使いで街に出るのも実は大好き。

街の人との交流は残念ながら最低限にしかないけど、それでもこの街を歩けるのは幸せだと思う。

交流で思い出したけど、出かける前にお屋敷で見た『糸』はもう見えなくなっている。

『糸』が見えるのは稀って程じゃないけど、時々ぐらい…かな？
しかも、ぼくの意味に関係なくだから、困る。見えれば幸せな気分になれるから、困ると言ってもちよつとただけだけ。

でも、考えてみると今日は朝に嫌みを言われたり殴られたりした以外は普段通りだし、週一のお出かけに月一の楽しみ、おまけに『糸』が見えたなんてもう幸運な一日といってもいいんじゃないかな？

そんな事を考えながら歩いていたのがいけなかったのか、前を見たら道の向こうから大きな馬車がすぐ前にまで来ていたので慌てて横によけた。

「うわっ!？」

「うおうっ!？」

道を歩いていた男の人にぶつかってしまった。馬車をよけられたけど、彼にぶつかってしりもちをついてしまった。

「ちっ。きたねえガキかよ。ってえなー、クソが!」

横によけたのは正解であり、同時に不正解でもあったみたい。

「ほらほら、そんなに怒らないで。相手は子供なんだし、今のは事故だと思っよ、兄さん」

目の前にいたのは男の人二人組で、しりもちをついているぼくを見下ろしていた。

一人は黒い革で作られた鎧を着ている、縮れた赤毛の髪と同じ色の顎ひげを生やした、第一印象は傭兵くずれの山賊っぽい。

もう一人はぼくが（まだお嬢様として扱われていた頃に）行った礼拝堂の神官様の体を覆う上下一体の白い服に似ていた物を着たブルンドのハンサムさん。

どうもぼくがぶつかった相手は傭兵くずれの山賊っぽい方だった。「ご、ごめんなさい! ぶつかってしまっでごめんなさい!」

謝った。本当なら立ち上がって謝った方が良いのも分かっていたのに、謝罪の言葉が口について出た。

「おいおい、兄弟。このガキ、完全にびびっちまってるよ。どうしたもんかね?」

「さあ? 兄さんはこわーい人にしか見えないし、当然の事だと思うよ。まあ、普段だったら兄さんは相手に法外な慰謝料を請求して、持ち物や財産どころか破滅するまで追い込むし」

「兄弟、俺を何だと思っていやがる。大体こんな銅貨一枚持つてねえ様な道端のガキから何が取れるってんだ!」

「うんうん、そうだね。良かったね、君。僕の優しい兄さんは見逃してくるそうだよ」

運が良かったのか、この山賊風の男とその弟と思われる神官様風のハンサムさんはぶつかった事を許してくれるらしい。

今日はやっぱりいつもと比べると運が良いのかな？

「ありがとうございます！ これからは歩く時は気を付けます！
本当にごめんなさい！！」

「お礼を言われちゃったよ、兄さん」

「これくらいで礼を言われるなんて、俺たちも偉くなったなあ、兄弟。じゃあ、このガキに……」

山賊風の男は右足を軽く上げて、

「……礼に対するご褒美を上げなきゃな！」

左足に衝撃を感じた。何が起ったのか一瞬理解できなかった。

足首に痛みを感じた時にやっと左足を踏み付けられた事を理解した。
「っ！？ いたいいたいーっっっっっっ！」

叫んだ。足が痛くて叫んだ。

「兄さんは本当に極悪だね。ま、ぶつかってきたこの子が悪いんだけどね」

「おいおい、兄弟。勘違いするなよ、俺はご褒美をくれてやっただけなんだからよ！」

「はいはい、そういうことにしておいてあげるよ。さ、これからお仕事の準備をしなきゃなんだから」

「準備なんざいらねーだろ、こんなにチヨロイ仕事あったか、今ま
でによっ！ もう二つ終わらせてんだぜ！ 残り一つもかーるく
しめて、金を貰えば世はこともなし、俺もお前も依頼したババアも
ハッピーハッピー、ってなもんだぜ！」

「駄目だよ、兄さん。じゃあ、ぼくう、僕達は行くからね。今度兄
さんとこんなことになったら足だけじゃすまないと思うよ。では、
ごきげんよう」

二人組は元々向かっていた方へと歩いて行った。ぼくはまだ足が
痛くて、手で踏まれたところをさすっていた。

目からは涙も浮かんていた……と思っていたら、今日二度目の『
糸』が見えるようになった。

人の多い街中だからなのかお屋敷での時よりもあちこちに色々な

色の『糸』が多い。

瞳の色が変わった右眼を慌てて隠す前に歩いているさっきの二人組を見たら、黒い『糸』が二人の体からたくさんのびていた。

やっぱり傭兵くずれの山賊だったのかな？

でも『糸』が見えても、今は嬉しさよりも痛みと辛さの方が強かった。

レストラン・アンジェル

痛む左足を引きずりながら、目的地であるレストラン・アンジェルにやっと到着した。

道中でのトラブルと左足を庇いながら歩いてきたので、普段よりも時間がかかってしまった。

本当ならお昼ご飯前のまだ空いている時間に来たかったけど、しようがない。

このレストランは新しくて珍しい方法で食事を提供していて、街の人達はもちろん、遠くからキャフルに來た旅人達も利用する人気のお店だ。

お店の中に入ったら思っていた通り、注文待ちの人ですでに混んでいた。

レストラン・アンジェルは普通のレストランと違って、注文を厨房につながっているカウンターで受けて、お金を払い、お店の人がお盆に食べ物を乗っけてお客さんに渡し、お客さんはそのお盆を持って店内の好きなテーブルで食べる。用意するのに時間がかかる物はお店の人が注文した人のテーブルまで持って来てくれるというサービスもしているらしい。残念ながら、ぼくは利用したことがないけど。

料理がおいしいのもあるけど、この独自の手法が人々にウケたのか街で最も繁盛しているレストランになった。

お昼になるとみんなこぞってレストラン・アンジェルに來るみたいですぐに混んでしまう。ぼくは月一にしか來ないけど、アフター家で飼われている死んだ当主の愛人との娘として有名だから、目立たない様に人が少ない時にこっそりと注文して食べて、お屋敷に早めに帰るようにしている。

カウンター前には人の列が二本あったので、右側の列の最後尾に並んで、順番を待ち始めた。

ぼくの前のお客さんは町娘がそのまま成長しておばさんになった
感じの三人組だった。

順番が来るまでの暇つぶしに彼女達の会話に耳を傾ける。

「今日は何食べる？」

「うーん、あたしはローストビーフのサンドにしようかしら」

「それ、前旦那と子供たちと来た時に食べたけど、美味しかったわ
よ」

「いいかもー。けど、ちょっと高そうねー」

「じゃあ三人で分ける？」

「いいなあ、ローストビーフおいしそうだなあ。ぼくも食べてみた
いけど、お金が……。」

「あー、後忘れちゃいけないのがあるわねー」

「そうそう、あるある」

「ここレストラン・アンジェル自慢の」

「」「」「クラム・チャウダー！！」「」「」

「あら？ 声が一人分多くなかった？」

「えっ、そう？」

「ま、いつか」

危ない、危ない。おばさんグループと一緒に頑張ってしまっ
た。でも、このクラム・チャウダーは本当においしい。

街の人達の中には徹底した節約生活を送ってまで通い詰めて食べ
る人もいるという噂も流れるくらい。

値段は平民にはちよつと高めの設定でカップが銅貨四枚、ボウル
では銅貨八枚。キャフルに住んでいる平民の一家族が一日不自由
なく生活できる金額が銅貨十五枚前後らしい。やっぱり、ちよつと
したゼイタクってやつなのかな？

ぼくの月一の楽しみっていうのがここでクラム・チャウダーカッ
プ一杯を窓際じゃないけど店の外が一望できるお気に入りの席で食
べることなんだ。

お金の方はもちろんぼく自身で用意できるはずもなく、お使いで

買った使用人用の石鹸代のおまけを貯めて、支払っている。

冷血執事ステュワードはババアに命令された通り、ぼくが渡されたお金をくすねない様に雑貨屋さんで必要な数の石鹸だけ買えるようにぴったりの額しか用意してないけど、実はここに抜け穴がある。街の雑貨屋さんのご主人は同じ品を十個以上購入すると銅貨一枚おまけしてもらえる。その銅貨一枚をぼくは毎週貯めて、四枚になったらお使用の後にレストラン・アンジェルでクラム・チャウダーを食べに来る事を月に一回、自分へのご褒美にしている。

銅貨一枚のおまけは今のところばれていない。ばれたら殺されはしないだろうけど、今朝やられた事が優しいと思える程の仕打ちを受けるんじゃないかな。

お使用にも行けなくなるだろうし、クラム・チャウダーも二度と食べられなくなるんだ、きつと。

あー、だめだめ。せつかく楽しみにしていた日なのに暗い事ばかり考えてちゃ！

頭の中を切り替えて、おばさん三人組の話にまた耳を傾ける。

「そういえば、旦那から聞いたんだけど、さ。今朝また見つかったそうよ……死体が」

「えー、またー？ 昨日から数えて二件目よー。物騒ねー」

ぼくがポジティブに前向きになろうとしたら、こっちが暗い話を始めてたよ、とほほ。

でも、普段は知ることが出来ない街の事件に興味がわいてきたので聞き続けてみる。

「お上もまずいと思ったのか動き始めて、あちこちにお役人が聞き込みしているんだって」

「やーねー、関係ないんだからうちには来ないでほしいわー」

「うちもよ！ で、誰の死体だったの？」

「えーと、昨日見つかったのがミスター・レジティムで今朝見つかったのがどうも子爵のエイキ様だったらしいのよ」

「貴族様が！？ 病死とか……じゃないのよね？」

「……うん、聞いた話だと二人とも何者かに殺されていたような痕が残っていたらしいのよ」

「何それ？　どんなの？」

「それが……気味が悪くて、ね。本当に聞く？」

「「うんうん！」」

「殺され方がどうも変でね、二人とも体に大小いくつかの風穴が開いていたらしいの」

「風……穴……？」

「何それー？　刺されたり斬られたり、それが銃で撃たれたり……じゃないのー？」

「どれでもないんだって！　直接の死因は心臓に穴が開けられて、だって聞いたけど。それでも不気味なのよ！　後、もう一つ、おかしな点があつてね」

怖くなつてきた。何で、こんな話を順番待ちでしているんだろ、おばさん達。

「二人の死体にはもう一つ共通点があつて、指が一本、何か刃物で断ち切られているんだって」

「えー、何それ……本当に気持ち悪い」

「ぼくも気持ち悪くなつてきた。食事前なのに……」。

「ミスター・レジティムもエティキ様も素晴らしい方達だったのに、ねえ」

「そうねー、特に子爵様は私達平民にも理解のある貴族様だったのにー」

「どっかの成金男爵家に比べると特に、ねえ」

「しっ！　後ろにいるわよ、あの家の娘が！」

おばさん達はぼくの方を見て、黙った。すぐに視線もそらして、微妙な表情を浮かべている。

ぼくはその成金男爵家の娘だということを知っていたらしい。でも、彼女達が勘違いしているのがアフアーレ家は元々男爵家で、成金なのは嫁いできたババアことエマだ。

でも、ぼくは何も言えない。この街にぼくの味方になってくれる人はいない。

「ね、ねえ。さっきの話に戻るけど」

おぼさんの一人が空気を換えようと話題を戻そうとした。

「死体の一部が断ち切られていたんでしょ？」

「そうよ、指ね」

「そうじゃなくて。最近聞いた噂なんだけどさ……『断ち切り屋』がこの街に来ているらしいのよ」

『断ち切り屋』？ 初めて聞く。何屋さんなんだろう？

「『断ち切り屋』ってー、あの何を生業にしているのかよくわからない『断ち切り屋』ー？」

「そうそう、高いお金を取って、何かを断ち切るとかいっらしいけど、怪しいわよねえ」

「本当ね……ってあんた、もしかして！？」

「そう、あんた達も気付いたと思うけど、あたし、この事件『断ち切り屋』が起こしているんじゃないかって」

「お国の方からお達しが前にあったじゃない。『魔法使い』、『魔女』、それに『断ち切り屋』を見つけたら、お上にすぐ伝えろって」

「うわー、そういう関係かー、『断ち切り屋』ってー」

「ま、これはあたしの想像による推理だし、確証は無いけど。でも、偶然にしちゃあ出来過ぎよ、ねえ」

「「うんうん！」」

仲いいな、このおぼさん達。でも、『断ち切り屋』さんか。どんな人なんだろう？ 悪い人なのかな？

おぼさん達は彼女達の順番が来たので会話を止め、それぞれの注文を始めた。やっぱリクラム・チャウダーを頼むんだ。

もうすぐ、ぼくの番だな、と思って横を見ると左側の列にはみんな注文を終えて、食事を受け取ったのか誰も並んでいなかった。

どうしようかな、左側に行って注文しちゃうのかな？ とかちよ

つと悩んでいたら、お店の入り口から足音がしたので、新しいお客さんかなと思い、ぼくは右側の列に居ようと決めた。

どんなお客さんだろう、と純粹に好奇心でぼくは左側のカウンタ―で注文するであろう今入店した人の方に目を向けた。

そこには変人がいた。

最初に自分の目を疑った。まばたきを数回して、その人を見てみた。両眼を擦って、もう一度見てみた。最初に目にした光景となんら変わりなかった。周りを見回してみた。さっきのおばさん達も店員さん達も食事を和気藹々と楽しんでいた店内のお客さん達もみんなビツクリした顔でその人を見つめていた。

この変人さんは変人以外の何物でもない姿をしていた。

ぼくの人生の中で見た男の人の中では背が一番高い。でも、そこが問題なのではない。この変人さんの色が問題なんだ。

一言で言えば、白黒。

二言で言えば、あべこべ白黒。

ちゃんと説明すると……普通なのは軽く焼けた感じのする肌だけ。髪の毛は染めているのか右半分が黒で左半分が白。服装はロングコートみたいんだけど、今度は右側が白くて裾が長く、逆に左側は黒く裾がショートコート並に短い。穿いているパンツはまた逆で右が黒で、左が白、左右の足の丈の長さは一緒だった。靴はこれまた逆なのかと思っただけど、パンツと同じ右が黒で左が白。おまけで白い布に包まれた大きくて長い何かを左の腰に下げている。（ぼくの予想では太めの剣みみたいな武器なのかな？ 普通のお仕事をしてなさそうだし）

顔は道中出会った非道い二人組のハンサムさんみたいな美形ではないけど、ちゃんと整っている感じ、かな。でも、なんか目付きが恐いから、悪人面にしか見えないけど。

でも、ここまであべこべだと眼もオッド・アイなのかと思っていただけ、両眼共に黒い瞳だったので、ちよっとつまんなかったかな。そんな恰好するんだったら、眼も徹底してよ、と。

顔でもう一つ、右頬が誰かに殴られたのか赤く少し腫れていた。
今朝ババアに殴られたばくみたいに。

変人さんは左のカウンターに向かった。

店員さん達は流石プロなのか変人さんが現れた時の衝撃から既に立ち直り、ぼくの前のおばさん達の注文した品を彼女達に手渡した。
おばさん達はまだ回復し切ってなかったのか、はつとして、お盆を受け取り足早に店内の空いているテーブルへ向かった。

よし、やっとぼくの番だ。月に一度のお楽しみ！

「クラム・チャウダをボウルで。それからサンドウィッチ・ザ・スペシャルつてのを頼む。後、オレンジジュース……いや、この街で自慢の飲み物つてあるか？」

ぼくがカウンターの前に立ったら、隣で変人さんが注文を始めていた。

「はい、街の外れにある果樹園で採れたりんごを使ったホット・サイダーが御座いますか」

「じゃあ、それで。後、店前の看板にあった本日のお薦めつて奴を一つ」

「キャロット・ケーキでございますね」

「そう、それ」

「クラム・チャウダをボウルでお一つ、サンドウィッチ・ザ・スペシャルをお一つ、キャロット・ケーキをお一つ。御注文は以上でございますか？」

「ああ」

「えーと、しめて銅貨三十五枚でございます」

す、すごい……変人さんだけど、お金持ちだあ……。このレストランで一番高いサンドウィッチ・ザ・スペシャルを注文した人を初めて見たなあ。冬に飲むホット・アップルサイダー、おいしいんだよね。キャロット・ケーキ、食べた事ないなあ……。どんな味がするんだろう？ 単純にニンジンの味なのかなあ。それにクラム・チャウダーをボウルでかあ。一度でいいから、ぼくもボウルで食べて

みたいなあ。

「ご注文は!？」

「は、はい!？」

変人さんの注文内容がすご過ぎて、ぼーっとしていたら、カウンターの店員さんに大きな声で呼び掛けられた。

「えーと……」

ビックリしていて、咄嗟にいつも注文しているクラム・チャウダーをカップで、と言えない。

「お待たせしました。ご注文の品です。スペシャルの方はお時間が少々かかりますので、お席にお持ちいたしますのでよろしいでしょうか？」

「ああ、そうしてくれると助かる。キャロット・ケーキも後にしてくれ」

「かしこまりました」

店員さんが大きめのボウルとマグカップが乗ったお盆を変人さんに手渡した。受け取った変人さんはテーブルのある奥の方へ歩いていった。

あ、変人さんの恰好に追加。髪の毛が白い方だけ腰に届くくらい長い。しかも、結んでいる。どう見ても変だし、何よりダサイなあ、あの恰好。

「ご注文は!!」

やばっ、忘れてた!

「ク、クラム・チャウダーをカップでお願いします!」

「銅貨四枚ね!」

ポケットに手をつ込んで、お金を手に取り、カウンターに銅貨四枚を置く。ぼくは年の割に成長していなくて、身長が低いから手を胸の所まで上げないといけない。

この身長と恰好のせいで女の子に見られず、よく男の子に見られちゃうのがぼくの最近の悩みだ。

「はい! クラム・チャウダー!」

イライラした店員さんがカウンターにカップとスプーンが乗ったお盆を置く。ぼく、泣きたくなってきた。

でも、食欲を刺激するいい匂いのクラム・チャウダークリーム・チャウダーが目の前にあったから、沈んだ気分もたちまち回復した。

お盆を持って、まだ痛む左足を纏れさせてこけないよう慎重に店内を歩く。

そのままお気に入りの席を目指したら、そこにはもう先客の人が座っていた。

さっきのお金持ちな変人さんだ。

彼が居るテーブルにはまだ座れる席があるけど、一緒にさせてくれるわけないだろうし、ぼくも変人さんと座るなんて嫌だ。

なので、窓の外の景色は見えなくなるけど、もうちょっと奥のテーブルをぼくは目指した。

それがいけなかったらしい。今日のぼくは不運につきまとわれていたみたいだ。

知らなかったのだが、近くのテーブルで食事していたのがぼくにとって悪魔だった。

変人さんの隣を過ぎようとした所で何かがぼくの左足を引っ掛けた。

「あつ!？」

痛みもあったからか、簡単にバランスを崩してしまった。そのま
ま、ぼくは前に向かって倒れそうになった。

そう思った瞬間、ぼくの胸の辺りを白い腕が力強く抱えてくれた。
ぼくはその腕に支えられたおかげで倒れずに済んだ。

ほっとして、助けてくれた白い腕を目で辿って確かめたら、案の
定というか、逆に意外だったというか、あの変人さんだった。

ぼくの頭の中は最初にお礼を言わなきゃな、それよりも誰がこんな
意地悪したんだろうとか色々なことがいい感じにごちゃごちゃし
ていた。有り体に言えば、混乱していた。

まずは変人さんにお礼を言おうと思い、よいしょと姿勢を正して、

お盆を胸に抱えて、彼の方に体を向けた。

……ん？ お盆……？ 何でぼく、お盆を胸に抱えているの？

変人さんの顔を見ると、彼はぼくを見ていなかった。彼の視線の先は床……まさか！？

ぼくはお礼を言うのも忘れて、床を見た。

最悪な光景だった。

ぼくのクラム・チャウダーが無残な姿になっていた。

床にスプーンとカップが落ちていて、中身が全部ぶちまけられていた。

ぼくはふつと力が抜けて、床に座り込んでしまった。

何でぼくだけ？ 月に一回の楽しみだったのに……。

一か月前の最後に食べた時からずーっと今日まで頑張ってきたのに、こんな目に合うんだろう。

お母さんが死んで、ぼくに優しくしてくれる人もみんないなくなってしまうって、ケチのつけどころでいっぱい的人生でもがんばって生きていこうと思わせてくれるのはもうぼくにしか見えない『糸』とここのおいしいクラム・チャウダーだけなのに。

ぶちまけられたクラム・チャウダーを見ていたら、涙があふれてきた。

普段ならもつとひどい目にあっても、泣くのは我慢出来たけど、今はもう無理だった。

「えぐっ、うぐ……ひ、ひっく……」

「けけっ！ 犬娘が泣きやがったぜえ！」

「……泣ーいた、泣ーいた！ 犬娘が泣ーいた！」

「てめえみてえのが外でめしなんか食ってんじゃねーよ！ ってか、おかしくねえ！？ てめえが金なんか持つてるわきゃねえのに、なあ！ おい！！」

変人さんの反対側のテーブルを見ると十歳を越えたぐらいの男の子四人組が騒いでいた。四人の中のリーダー格として振る舞っている着崩した赤いスーツと揃えているのか赤い宝石のアクセサリーで

（趣味が悪いとしか言いようのない感じで）着飾った男の子がいるのが見えた。

宙に浮いて喚いていた。

「へ？」

わけがわからなくて、間拔けな声を出してしまった。

ガキは正しくは宙に浮いているのではなく、ぼくを助けてくれた白い腕が彼の髪の毛を握って宙に持ち上げていたんだ。

変人さんがぼくをまた助けてくれた……？

「いてえ、いてえよ！ この白黒の変態やろお！ 離せ、いまはなせえ！ 髪が！ 皮がむけるううう！！ おれを誰だとおもっていやがるんだ！ この街の主であるアフアーレ家の嫡男だぞ！ ちくしょう！ はなせよお！ いなかやろおおおおおおお！！」

変人さんではあるとぼくも思うけど、変態さんかどうかはわからないよ、とあまりの光景にバカな事を考えてしまった。

「目の前の糞ガキ一匹が誰かなんぞ、知った事か」

変人さんは赤いガキの頭を彼の肩の高さまで持ち上げたまま、よく通る低い声でしゃべった。

「ほんとにはなせえ！！ くそやろお！ てめえ、この犬娘を助けたつもりかよお！？」

そうだったら、かなりうれしいな。ぼくはもう泣き止んでいた。

「勘違いするな、俺はそこで泣いているガキなんかに興味はこれっぽっちも無い」

え、違っの！？

「はあ！？ じゃあ、何でおれにこんなマネしてくれてやがんだよおお！？ てめえに何かしたかあ！？ ああん！？」

「知りたいのなら教えてやる。俺は今朝から機嫌が悪い、果てしなく悪い、目の前に神だろうが悪魔だろうが居たら即断ち切って殺してやつてもいいくらいに悪いので、せめて美味しい物でも食おうとこの街で有名な店にわざわざ出向いて、さあ食えるぞと思ったら、お前らみたいな糞ガキ共がメシを不味くする様な事をしていやがる。俺としては、この時点でもう赦せないが寛容な俺は赦そうと最大

限努力をした」

努力したの！？

「だがな、糞ガキ、そして一緒にいる糞のカス共。お前らはクラム・チャウダを駄目にしやがった。俺の目の前で、超絶機嫌の悪い俺の目の前で。俺には赦せないモノが結構あるんだが……」

結構多いの！？

「食い物を駄目にする奴は中でもトップ5に入るくらい、赦せないんだよ」

「てめえのじゃねえだろ、いてっ！ そののはよお！」

「誰のかは関係ない、食い物である以上」

「はあああああああっ！？」

「店の中を汚す気は全く無い。だから、今すぐに俺の視界から消える。見逃してやる。だが、そうでないのなら……」

変人さんが白い布に包まれた武器と思われる物に左手を添える。

ガキ共全員が息を呑んだ。

「お前ら全員のチンコと金玉を切り落として、たて筋を入れてやる。親切な俺はサービスで穴も一つ増やしてやるよ。な、嬉しいだろ？」

さっき思った事を訂正しよう。変人さんどころか変態さんだ。

「……はいいいいいいいいいいいいいいいいいい！！」

！！！！！！

ガキ共は全員股間を両手で押さえ、下っ端達は走って逃げた……

捕まっている赤いガキをここに残して。周りを見ると近くで会話が聞こえていた男のお客さん達も同様にしていた。こういうのは男の人にはやっぱり怖いのかな？

変人さんは赤いガキの髪の毛から手をようやく放した。赤いガキはそのまま床にしりもちをついた。でも、すぐに立ち上がって、先に逃げた下っ端三人を追いかけて店から出て行った。

ぼくがぼくんとしていると変人さんがぼくの前まで来て、「立てるか？」と手を差し伸べてくれた。手を貸してもらって立ち上がったら、ぼくの両肩を持って、彼が座っていたテーブルの席の一つ

に座らされた。

彼の行動の意味がわからず、あたふたしていると

「おい、ガキ。お前、孤児か？」

「い、いえ！ 違います！」

即答だった。家族はもういないけど、お屋敷に住んでいるから嘘ではない。

「金は持っているか？」

「……もう、ないです」

「そうか。じゃあ、ここで待っている」

変人さん改め変態さんはばくにそう言い残して、店内のどこかに行ってしまった。

ぼくはさっきの騒動で他のお客さん達の注目を集めてしまって、恥ずかしかったし、クラム・チャウダーは食べられなかったし、ガキ共じゃないけど、もうここから消え去りたかった。

でも、まだ白黒の変態さんに結果的に助けてもらった事に対するお礼を言えていなかったから、静かに座って彼を待った。

待っている間に店員さんが来て、汚れた床を素早く掃除してしまった。ぼくがしておいた方がよかったのかな？

そんな風に考え事をしていたら、変態さんがボウルとマグカップが乗ったお盆を片手に、反対の手にはコシヨウをふりかける木製で大きいのを持って戻ってきた。

「あ、あの……さっきは」

変態さんは声をかけるぼくを無視して、お盆をぼくの目の前に置いた。

お盆の上にはとてもいい匂いがするクラム・チャウダーのボウルとちよつとした酸っぱさが病みつきになるホット・サイダーがマグカップに注がれていた。

ぼくはますます意味が分からなくなつて、「あの、これは……？」と変態さんに質問すると彼は手に持った道具を指して、

「これか？ これはペッパー・ミルっていうコシヨウを挽く道具だ。」

店のキッチンから今借りてきた」

いや、そうじゃなくて。ぼくも何の道具ぐらいかは知っている…
…名前は今知ったけど。

変態さんは手際よくぼくの前にあるボウルと彼のボウルにコシヨウをぱっぱとふりかけた。

変態さんはペッパー・ミルをテーブルの上に立てて、席に座り一言。

「いただきます」

スプーンを手にして、クラム・チャウダーを食べ始めた。

ぼくはぼーっと彼が数口食べているのを見つめていたが、

「食わないのか？ 冷めるぞ」

その声に驚いてしまって、お礼を言うのと彼の行動の意味を尋ねるのを忘れて、

「はい！ いただきましたしゅ！」

噛んだ、噛んでしまった。恥ずかしい。

でも、変態さんはぼくが噛んだことも気にせず、スプーンを黙々と動かして続けた。

なので、ぼくもスプーンを手に取り、ひとさじクラム・チャウダーを掬って、自分の口に運んだ。

「ん！ んー、おいしい！」

ちよつとコシヨウで辛いけど、いつもよりおいしい！ 歯ごたえのあるクラムをいっぱい使ったこのクラム・チャウダーは本当においしい！ しかも！ しかも！！ 小さいカップじゃなくて大きいボウルだ！！ ぼくは初めてのボウルでいっぱい食べられる幸せをクラムと一緒に噛みしめた。

変態さんもぼくももうすぐクラム・チャウダーを食べ終わりそうになった頃に

「お待たせしました、サンドウィッチ・ザ・スペシャルをお持ちしました」

女の人の店員さんがお盆の上に大きなお皿を二つ乗せて来た。

そして、片方をぼくに、残ったもう片方を変態さんの前に置いて、「では、ごゆっくりどうぞ」と言って、空になったボウルを持って歩き去ってしまった。

サンドウィッチ・ザ・スペシャルが二つ。ぼくはまたまた何がどうなっているのか判断出来ない状態にあった。

変態さんはグラスについてある氷水で一旦のどを潤して、グラスをテーブルに置いて空いた左手をそのまま彼のサンドウィッチに伸ばした。

「あ、あの！」

さすがに今の今までお礼を言っていないのはいけないと思い、大きな声で彼に声をかけた。

彼もサンドウィッチを手に持ったままだけど、ぼくの方に注意を向けてくれた。

「さっきは助けてくれてありがとうございました！」

「ああ？ ああ、さっきの、ね。気にするな、お前を助ける為にやったわけじゃない。俺が個人的にあの糞ガキ共にムカついただけだ」

「でも、ぼくから見たら結果的に助けてもらった事にかわりありません！ それにこんな…… クラム・チャウダーまでごちそうになつて……」

「おい、ガキ。今何て言った？」

「はい！？」

え、ぼく、今変態さんを怒らせるようなこと、言った！？

「クラム・チャウダーじゃねえ、クラム・チャウダだ」

「はい？」

「チャウダーと最後の発音を伸ばすんじゃない、チャウダ、と止める。それが正しい発音だ」

「ちゃ、ちゃうだ？」

「そう、そうだ」

わけのわからないこだわりを持つ変態さんはぼくの発音に納得しづらい。

だから、そうじゃなくて!!

「どうして、ぼくにこんなごちそうしてくれるんですかっ!？」

やっと言えた。この様子だとぼくの目の前にあるサンドウィッチ・ザ・スペシャルもぼくの物らしい。

「泣いていたからだ」

「え？」

「なけなしの金でクラム・チャウダを食おうとしていたんだろう？それを駄目にされて、泣いた。俺はな、食い物を駄目にする奴は殺したくなるぐらい赦せないんだが、食い物のありがたみを判っている奴には優しくしようと心に決めている」

変態さんは口角を上げて、笑った。目付きの悪い怖い顔だったんだけど、笑った顔はなんだろう……ちょっと子供っぽくて、かわいかった。

その笑顔を見て、ぼくは自分の考えを改めて、彼の（ぼくの頭の中で）呼び方を変態さんから変人さんに戻した。

「それよりもビックリしたのはガキ、お前が女だったってことだな。なりもそうだが、ぼくとか言っているし、声変わりもしていない若い男のガキだと思っていたんだがな。腕で支えた時に微かに、本当に微かぁに膨らんでいた胸で女だと分かったんだけどな。もうちょっと食って、ちゃんと育てろよ」

前言撤回、こんな人は変態さんで十分だ!

「男の子じゃないもん! おっぱいが小っちゃくてもぼくは十五歳の女の子だもん! ガキじゃなくて、ちゃんとアリーセって名前があるんだもん!!」

「あーはいはい、いいからとっとと食べ。あと十五つてのは正直嘘だろ」

「むー!」

ぼくは自分が密かに気にしている身体的特徴こばいおを指摘されて怒っていたけれど、おなかが減っていたのでサンドイッチをががつと食べ始めた。

んー、サンドウィッチもおいしいよお！

このレストラン・アンジェルで一番高いサンドウィッチ・ザ・スペシャルは豪勢という言葉以外では言い表せないくらい豪華さだ。お店で焼かれている若干大きめの食パンに色々な具材を惜しみなくはさんだ六種類のサンドウィッチプレートなのだ。

お皿の上にはスタンダードなベーコンレタスマトから始まり、自家製ローストビーフ・アンド・ザワークラウト、グリルドチキンとプロバローニチーズ、スモークサーモンとクリームチーズ、そして甘いブルーベリーのジャムという隙が全くないお店自慢の一品だ。ぼくは今、まさに幸せを噛みしめている。クラム・チャウダのボウルだけでなく、前人未到のサンドウィッチ・ザ・スペシャルも食べ、さらに店員さんにテーブルまで運んでもらう初体験までしちゃった。

おねがい！ ゆめならさめないで！

変態さんはデザートのカヤロット・ケーキまでしっかり完食した。ぼくはさすがに食べきれなくて、残したサンドウィッチは店員さんに包んでもらった。（カヤロット・ケーキはしっかり食べた。女の子にとって甘いものは別腹だよ！）

「ごちそうさまでした。すごくおいしかったです。気にするな、と言われてもぼくはお礼を言いたいんです。助けてくれた事、ごちそうしてくれた事……本当に色々、ありがとうございました」

食後の紅茶も飲み干し、彼が「さて、そろそろ行くか」と立ち上がったので、もう一度お礼を言った。

彼は驚いた顔をして、苦笑と思われるような微妙な顔をした。

「他人に何度も礼を言われるとは。仕事柄、普段そんなことがないから、反応に困るな」

「そうなんですか？ でも、自分が喜ぶことをしてもらったら、ちゃんと感謝の気持ちを込めてお礼をしなさいって死んだお母さんに

教えられていたんです」

「そうか。まっ、お前にした善行で今朝の厄落としになったか」

「厄落とし？」

「言っただろ、今朝から超絶機嫌が悪かったと。宿で寝ていたら突然頬に殴られたような衝撃と痛みがして、飛び起きた。お。やっとな腫れが引いたな」

彼は右頬をしゃべりながら左手で触った。そして、右手の人差し指で左足首を指し、

「ここに向かっている最中に足を思いつき蹴られたか踏まれたかのような痛みを感じてな。本当どこのどいつだ、善良な俺にこんな痛い目を見せる不屈き者は、ってな」

へー、今朝のぼくみたいだな、と話を聞きながら頭の片隅で思った。あれ？ でも、変態さんの話だと誰かに殴られたり蹴られたりしたわけじゃないのに、顔や足に衝撃と痛みを感じた……？

「じゃあ、十五の女にはとてもとても見えないメスガキ。俺は急ぐんでな」

変態さんの言葉で疑問はぼくの頭からどこかへ飛んでいつてしまった。

「メ、メスガキじゃないです！ アリーセってさつきも教えたよ！ むー！ あっ、急ぐってもうこの街を出るんですか？」

ちよつと、さびしいな。やさしくしてもらえたのに。

「いや、仕事だ。急に入っちゃって。この街には元々探しモノがあつて訪ねたんだが、これがまあ簡単に見つからなくてな。探しモノの方から俺の仕事に関わってこいと期待しているんだが、そううまくいくかどうか……」

「うまくいくといいですね。ところでお仕事は傭兵か何かですか？ 腰に下げている布に包んでいる大きなのは剣ですか？」

彼が来店した時からの疑問を思い出したのでぶつけてみた。ダサイ恰好のことは聞いてみたいけど、やめておいた方が賢明かも。

「仕事はなあ、傭兵なんかやっているよりもずっと好い仕事だ」
もっかる

命をかけて戦う傭兵よりも儲かる仕事？ 何だろ？ 暗殺者？

いやいや、こんなにダサくて目立つ格好の変態さんじゃ似合わない。
「こいつも剣なんかじゃない。商売道具には違いないがな。剣なんかよりよっぽど頼りになる」

左手をこぶしにしてコンコンとそれを叩く。

ぼくたちは店の外に出た。

「あの、街を出る前にもう一回会えませんか？ あと、せめて、お名前だけでも」

ぼくは勇気を振り絞って訊いてみた。

「会つのも名前を教えるのも駄目だ」

即答だった。

「余計な縁はつくりたくないんでな。今回ののはほんの気紛れだ」

「そう……ですか……」

「そこまで落胆するな、お前と俺の間に縁があつたらまた会うさ」

「……はい」

「じゃあな、発育不良のメスガキ」

「アリーセだよ！ 変人さん！ 本当にありがとう！ また会えたらうれしいな！！」

彼はぼくが帰る逆方向に歩いていった。ぼくは彼の後姿が見えなくなるまで、立っていた。一度も振り返ってくれなかったけど、気のせいかな、ぼくと彼との間に『糸』が見えた気がした。

悪魔の針

ぼくは変人さんとレストラン・Angelの前で別れて、大通りをお屋敷に帰る方へ歩いていった。

お昼過ぎだからか、それとも午後のオシャレなティータイムなのかはわからないけど、外を出歩いている人の数は少ない。

山賊っぽい男の人に踏まれた左足の痛みもいつの間にか消えていて、ぼくは幸せな気分で浮かれながら街並みを楽しむ。スキップでもしそうなぐらいだけど、店員さんに包んでもらったサンドウィッチをためにしちゃうかもだから、しない。ぼくはスキップしたりするとほぼ確実にこける。

せっかく変人さんがごちそうしてくれたサンドウィッチ、夕ごはんはお昼に比べるとはてしなく悲しいことになりそうなので、隠れて食べちゃおう。残ったら明日の朝も豪勢だ！

そんな今朝の自分だったら信じられないぐらい幸せな未来を想像しながらルンルン気分で歩く。

顔が勝手ににやけちゃう。どうしよう。えへへ。

「ちよつとそこの顔が残念になるくらいにやけているお嬢ちゃん」
しゃがれた声でいきなり呼ばれた。しかも、なんか悪口まで言われたような？

「え？ おじょうちゃん？ ぼくのこと？」

「お前さんだよ、お嬢ちゃん。頭が残念じゃないのなら、ちよつとこつちにおいで」

ぼくは声がした方へと目を向ける。

その先にはお昼時に会った変人さんや変態さんの類がいたわけはなかった。

黒ずくめの不審人物がぼくに声をかけていた。

大通りの道端に暗い紫色の大きな敷き布を広げて、その上にきれいな丸い水晶や何を煮ているのかよくわからない鍋とか様々な物を

置いてある中でおばあさんらしき人が座っていた。

頭を含む全身を黒いフードとローブでおおっているの、声でおばあさんだと判断してみる。フードも深く被っているし、こんな恰好じゃあ表情も見えないよ。

昔、村のお話好きなおじいさんに聞いた「これぞ占い師！」といった風体である。

あやしさはおじいさんの話以上だけど……。どっちかっていうと噂に聞く魔女っぽい感じがするな。誰かお役人さん達に知らせたりしないのかな？

「ほら、お嬢ちゃん、早くこっちにおいで。頭も体もとろいんじゃないよ、早く」

何気に失礼でひどいこと言うな、このあやしいおばあさん。

でも、お昼の一件で久しぶりに人のやさしさを感じたことで、他人との会話やつながりにぼく自身が飢えていたのか、おばあさんの所にちよつと急いで近付く。

「本当にとろいねえ。忙しいあたしが暇そうで使えなさそうな残念なお嬢ちゃんを慮って声をかけてあげたつてのに」

他人とのふれあいに飢えていたさつきまでのぼくを消し去りたい。このおばあさん、優しさなんてない。毒だけだ。

「あたしの事を悪く思っているような顔をしているよ、お嬢ちゃん」
「そんなことはカビの生えたパンの欠片ほども思っていないません！」
するどい。だてに魔女みたいな恰好をしていないみたい。

「残念なお嬢ちゃんにあたしが何を思われようがいいけどね。あたしやこんななりだしね」

「……ご、ごめんなさい」

おばあさんに対してなぜかちよつと罪悪感がわいてきた。それを払拭したくて、謝った。実際に悪いことを考えていたのは事実だし。

「さあ、そこに座りな、残念胸のお嬢ちゃん」

人のコンプレックスを的確に突いてきた。やっぱりこのおばあさん、毒なだけだ。

ぼくはこの毒性おばあさんに言われた通り彼女の目の前に座った。
「で、ぼくに何のご用ですか？」

ぼくの声は不機嫌さを全く隠していなかった。幸せだったお昼が
遠い昔のことみたいだよ。

「慈悲深いあたしは善意でお前さんを呼び掛けたつてのにね」

「それはどうもありがとうございます」

どう聞いても善意じゃなくて悪意しか感じられない。

「あたしの話を聞きたくないんなら去ってもいいんだよ。後で後悔
するのはお前さんだけだね」

意味深な声色でおばあさんはぼくに言う。これが占い師の話術な
のかな？ ちよつと、本当にちよつとだけ気になった。

「えーと、やつぱり……うん、やつぱり聞きます」

ぼくの言葉を聞いたおばあさんはうなずきながら勝手に納得して
いた。

「そうかい、あたしの慈悲深さが漸く分かったか」

いや、わからない。分かったのはおばあさんの性格の悪さと言葉
の毒と話術だけ。

「残念な頭しかないお前さんの為に説明してやると、あたしや人を
占う占い師。しかも腕のとびつきり良いね」

「占い師なのはわかります、そんなあやしい恰好をしてれば。腕が
良いのかは知らないけど」

言い方は変だけど、あやしさ満点の恰好は占い師としては真つ当
なんじゃないかな？ 変な恰好だったら変人さんの方が凄かったけ
ど……。そういえば、彼のお仕事は結局わからなかったな。

「一丁前に生意気な口をきくね」

「ぼくの幸せな午後のひと時をおばあさんの毒で台無しにされたか
らです！」

最近のぼくには珍しく語気強く言い返した。

「そうかいそうかい」

「あ、そういえば、占ってくれるのはいいんですけど……ぼく……」

お金、持ってないです」

お昼のあれでばくのポケットは空っぽだ。

「お前さんが金を一銭も持ってないのは一目瞭然さ。そんな小汚いなりをしてるんだからね」

「こ、こぎたないって……」

これでもお風呂に入ってきれいにしてるもん！ 小汚いのは服のせいだもん！ やっぱり人^{ほく}を傷付ける毒みたいな言葉しか吐かないよ、このババア！

「お前さん、今、あたしの事ババアと心の中で罵らなかつたかい？
「いいえ！ まったく……！」

本当にするどい。下手なことは考えないようにしよう、うん。

「お代はいらないよ、あたしが前を歩いていたお前さんを見て、勝手に占つて、結果を伝えてやろうと声をかけたただけなんだからね」

「ふえ？ 勝手に占つた？ もう？」

「聞こえなかつたのかい？ 耳も残念なのかね？ 驚きの結果が出なかつたら声なんてかけないよ」

「え？ じゃ、じゃあ、占いの結果は……？」

ドキドキ、ワクワク。

「お前さん、明日死ぬよ。殺されてね」

「……っえ？」

おばあさんはぼくになにをいった？

「……し、しぬ？ ぼくがあしたころされて、しぬ？」

「存外理解が早いじゃないか。残念な頭と呼んだ事をちよつと残念な頭に訂正してやろうじゃないか」

そんなこと、どうでもいい。今はおばあさんの占いの結果を否定しなきゃ。

「じよ、冗談だよな。そんな、あ、あつさり他人に、おまけに、しよ……初対面で、お……お前さん明日死ぬよなんて簡単に言うなん

て、さ。そ、それにこれ、ただの、う、占いでしょ？　そうだよね？」

ぼくの声は震えていた。

ぼくの心はおばあさんが次に「嘘に決まっているさ。冗談もわからないのかい、お前さんのちよつと残念な頭は」と言ってくれるのを期待していた。

「あたしの占いをなめちゃいけないよ。あたしの占いは絶対に当たる。当たってしまう。そういう占いだからね。お前さんは明日、絶対に殺されて死ぬ」

「そ、そんな、うそだ！　占いなんてインチキに決まっているよ！　！」

叫んだ、力いっぱい。いくら人通りが今は少ないとはいえ、街の中で目立ってしまう可能性もあったのに、そんな事はぼくの頭からぶっ飛んでいた。

「お前さんの生まれはこの街からちと離れたエテという名の小さな村だよ」

そんな必死で叫ぶぼくに、おばあさんはしゃがれた声で語った。

「貴族の屋敷でメイドとして奉公していたお前さんの母親は孕んで、故郷へと帰った。で、産んだのがお前さんだよ、アリーセ。この名前はお前さんの母親が好きだった物語の主人公の名前で、娘が生まれたら名付けると決めていた。そうだろう？」

何で？　おばあさんの今言った事は全て事実だ。それも死んだお母さんがぼくにしか教えてくれなかったぼくの名前の由来……何で初対面のおばあさんが知っているの？　そもそもぼくは彼女に名前を教えていない！

この占い師、お母さんに会ったことが……あるんじゃない？

「いい顔するねえ、お嬢ちゃん。言っておくがあたしゃお前さんの母親に会ったなんてこたないよ。残念だったねえ」

ぼくの期待はおばあさんの言葉で脆くも崩れ去った。

「わかつちまうのさ。それがあたしの占いさ」

ぼくの人生、ケチのつけどころでいっぱいだけど、悲しいこと、痛い目も見ただけれど、死ぬなんてことはなかった。

ぼくにとって、死を生まれて初めて身近に感じたのはお母さんが病気で死んだ時。でも、お母さんは最期には一切苦しまないで、眠るように逝った。安らかで、ぼくにいつもやさしく微笑んでくれたきれいな顔のままで、あたたかさが失われていく体に触れてやっと死んでいる事を実感した。

お母さんが死んだ時に感じたのは自分の世界に大きなピースがなくなった様な喪失感。でも、恐さはなかった、死に対する恐さは。でも、ぼくの父だと名乗っていたアフアーレ家のご主人様の死を目にした時、ぼくは恐怖を感じた。あの毒々しい黒の『糸』がもう動かない彼の体からのびているのを見て、死ぬということを、そして殺されるということを理解^{みて}してしまった。

あれ以来、お屋敷でどんなに辛い仕打ちを受けても、殺されなければ、死ななければいいと思うようになった。

「お前さん、幼いなりのわりには死ぬことに対して敏感じゃないかね」

くくつ、とぼくの気分をどん底に落とした張本人が喉でわらう。^{おばあさん}

「な、なんでこんなひどいことを……ぼくに教えたの？」

「ひどいかね？ あたしゃひどくないさ。逆に親切さ、お前さんにとつてはね」

おばあさんは組んでいた手をほどいて、自分の懷に片手を入れる。
「お前さんが明日殺されて死ぬ事は確かだよ。それは運命だ、神の誰かが決めた事だね」

「運命なんて信じてないっ！ 神様なんて信じられないっ！」
だから、ぼくは信じないっ！

「ぼくが明日死ぬなんて信じないっ！！」

「いいさ、お前さんが信じようが信じまいが明日は来る」

「……っ！」

「でも、それじゃあお前さんがあまりに可哀想だからねえ」

おばあさんは懷に入れていた手を抜いて、ぼくの目の前に差し出した。

「あたしの占いが外れる様に、お前さんが救われる様に、あたしはお前さんにお守りをくれてやるよ」

彼女の右手には一本の黒い針が親指と人差し指に挟まれていた。

「この針が……お守り？」

黒い針は色以外は一見普通だった。細くて短くて尖っていて、刺さったら痛そう。そんなごく普通の針。

「そうさ。これがけつたいな運命も変えてくれる最高のお守り『悪魔の針』さ」

「『悪魔の針』？」

「神が用意した運命をどうこうするんだ、悪魔ぐらいの力じゃなきゃ無理に決まっているよ」

でも、悪魔って、何か……

「不吉だよ。それに胡散臭いよ、その黒い針」

もし「街の怪しいアイテムコンテスト」みたいなイベントで確実に上位を取れそうな品だよ、どう考えたって。そんな物を持っていたても本当に明日殺されるような事になっても、お守りとして役に立たないよ！

「本当に残念だね、お前さん。せっかく無料でかわいそうなお前さんにこれをくれてやろうとおもったのにね」

「死ぬのは恐いけど、そんな怪しさ満点胡散臭さがたまらない針なんて誰も欲しくないよ」

「じゃあ、これが本物ってのを見せてやろうじゃないか。ほら、お前さん、針を持ちな」

おばあさんはぼくに針を手渡して、また懷に片手を入れた。

次に取り出したのは何の変哲もない白い糸。さらにその糸もぼくに渡した。

「その糸を針の穴に通してみな」

「へ？ 糸を通すだけ？」

自然と呆れた声が出た。

「そんな簡単な事で本物だって証明できるの？　ぼくが針に糸を通せなくても残念とか言ってバカにしない？」

おばあさんはくくつ、とまた喉でわらい、

「しないさね、糸がその『針』の穴を通る事なんてないからね」
そう言われると俄然通してやろうという気が湧いてくる。

結構長い時間挑戦した。回数はしつかり数えてないけど、百回以上は頑張ってみた。結果は、おばあさんの言っていた通り、糸は一回も通らなかった。

「気が済んだかい。残念な頭でも理解できただろう」

「ぼくが不器用なだけとかかもしれないじゃない！」

自分の欠点を使って反論する。この際、意地だ。

「物分りの悪い残念なお嬢ちゃんだね、お前さんは」

「そのどこが悪い！」

おばあさんはため息を一つ。

「分かった、じゃあもう一つでこれが本物だって証明してやろうじゃないか」

「いいよ。で、ぼくはどうすればいいの？」

おばあさんは右手の人差し指をぴつと立てて、ぼくが持っている針を指し言った。

「その『針』でお前さんの指を刺してみな」

「やだ」

「間髪入れずに嫌がるな。痛くないよ、その程度」

「おばあさんので試せばいいよ」

「あたしのじゃ駄目なんだよ」

ちえつ。残念。というわけで、ぼくは針を持った反対の手の人差し指の腹にちくつと刺してみた。ちよつと痛いかも。

次の瞬間、ぼくはこの黒い『針』に対しての認識を改めざるを得

ない事態を目の当たりにする。

『針』を指に刺した瞬間、ぼくの血がぼつと指の上で染み出て赤い点を作る筈なのに、血は宙を舞い、見たこともない文字を羅列した様な線を描いた。

「なにこれ、すごい」

あの『糸』以外でこんな見たの、初めてだ。しかも、この血文字（なのかな？）は『糸』と違って誰でも見えるみたいだ。『糸』みたいにきれいじゃないけど、これも十分すごい。

「ようやく信じたみたいだね。お前さんの残念な頭でもここまですれば……お、お前さん、その左眼……？」

「え？ あ、あれ？」

突然だった。おばあさんに指摘されて気付いた。突然、ぼくの視界には『糸』が張り巡らされていた。今日三度目だった。

『糸』はいつもの感じと違った。色が様々なのは変わらない。明確な違いは二つ。

一つは『糸』がつながっているのは人同士ではなく人と物、もしくは物同士だ。おばあさんが座っている敷き布やその上にある水晶などから『糸』がおばあさんにのびている。

もう一つは『糸』が見えているぼくの眼だ。普段人のつながりが見えているのは右眼で瞳は蒼色に変わるけど、物のつながりが見えるのは左眼で瞳は紅色に変わる。

この物の『糸』が見えるのは人同士のモノよりも稀で今までに見た回数は圧倒的に少ない。十回にも満たないんじゃないかな。

「お前さん……その左眼は……」

おばあさんが驚いている。いきなり人の瞳の色が変わったら普通は驚くだろう。

でも、まずいな。他人には見せちゃいけないのに……。

そんな時、ぼくは異常な事に気付いた。

おばあさんが『悪魔の針』と呼んでいるあの黒い『針』をこの眼で見た時に気付いた。

この『針』には一本も、そう一本も『糸』がのびていない。
今までの『糸』を見てきた経験からこんな事はあったことがない。

少なくともぼくの知っている限りでは『糸』はあらゆるモノからのびて、ナニかにつながっている。

これはぼくの唯一理解している世界の真実だ。

だけど、この黒い『針』は違う。

なぜか寒気がした。

「お嬢ちゃん、『針』から『糸』がのびていないんだろっ」
っえ!?

「おばあさんっ!?’ 『糸』が見えているのっ!?’

ぼくはおばあさんに迫った。今日は本当に驚きの連続だ。

「知っているだけだよ。あたしにや視えんかね」

「じゃあ、何で……」

「職業柄知っているのさ。それに、あたしやお前さんとは違うからね」

強く否定された。しかも、おばあさんの言葉からはぼくに対する明確な拒絶を感じ取った。

「こんな所でその眼を見るとはね。あたしも悪運が強いのか、それとも運がないのかね」

「はい?’

「お前さんには関係の無い話だよ。ま、この『針』に糸がのびていないのは単純明快だね。これはこの世界のモノじゃないからさね」

「このせかいのものじゃない?’

「だから、森羅万象（あいうえお）と繋がりが無い。故に『糸』がないのさ。繋がりが無いからさっきの糸も穴に通せない。あの穴に通る糸はただ一本さ」

「どんな……一本?’

ぼくは息を呑む。

「特別な一本さ。特定の条件でしか顕れない。お前さんがどうしょ

うもない時、心の底から救いを求める時、この『悪魔の針』を自分の胸に刺しな」

おばあさんは人差し指でぼくの胸の、心臓の上辺りを軽く突いた。「胸の刺し傷から流れた血がお前さんがさつき見た文字を宙に描くそれを詠めば『針』は糸に繋がるのさ。そして、お前さんの望みや願いがきつと叶うはずさ」

文字？ でも、あれって……

「読めないよ。ぼく、普通の文字もちゃんと読めないのに」

おばあさんは多分、わらったんだと思う。深く被ったフードのせいで見えなかったけど。

「読める様になるさ。コレを必要とした時にね」

「……ふーん。じゃあ、おばあさん、ありがとうございます」

何はともあれ、ひどい目にもあったけど、おばあさんはぼくを心配して世話を焼いてくれただろうから、お礼はちゃんと言う。毒成分がほとんどだったけど。

「気にしないでいいさ。ちゃんと『針』は持っておくんだよ」

「はい、そうします。あ、あと……」

「『糸』が視える眼の事は秘密にしとくよ」

「あ、ありがとうございますっ！　じゃあ、さようならっ！」

ぼくはお屋敷へとまた歩き始める。

「お嬢ちゃん、貴女の願い、悪魔にしっかり叶えてもらいなさいな。うふふ」

突然、後ろからきれいな声が聞こえた。声は占い師おばあさんに似たような、でもしゃがれていない、若い女の人のものだった。

ぼくが慌てて後ろを振り向くともう誰もそこには居なかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2646y/>

少女と断ち切り屋と悪魔の針

2011年11月17日03時28分発行